

興來大躍野歸
也續為其福
國師忍為
世乙
于止
夫
國師忍為
世乙
于止
夫
國師忍為
世乙
于止
夫

漱石全集
五卷

虞美人草

(全三十四卷 第十一回配本)

昭和三十一年十月二十七日 第一刷發行

◎ 漱石全集 第五卷

定價 百五十圓

著者 夏目漱石

發行者 岩波雄二郎

印刷者 山田一雄

發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋三ノ三 株式會社

岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします



明治四十年五月撮影

目次

虞美人草

解 說
注 解

三

三二七

三三九

虞美人草

明治四〇、六、二三—四〇、一〇、二九

一

「随分遠いね。元來何所から登るのだ。」

と一人が手巾で額を拭きながら立ち留つた。

「何所か己にも判然せんがね。何所から登つたつて、

同じ事だ。山はあすこに見えて居るんだから」

と顔も體軀も四角に出来上つた男が無雜作に答へた。

反を打つた中折れの茶の廂の下から、深き眉を動か

しながら、見上げる頭の上には、微茫なる春の空の、

底迄も藍を漂はして、吹けば揺くかと怪しまるゝ程柔

らかき中に屹然として、どうする氣かと云はぬ許り

に叡山が聳えてゐる。

「恐ろしい頑固な山だなあ」と四角な胸を突き出し

て、一寸櫻の杖に身を倚たせて居たが、

「あんなに見えるんだから、譯はない」と今度は叡山を輕蔑した様な事を云ふ。

「あんなに見えるつて、見えるのは今朝宿を立つ時から見えて居る。京都へ來て叡山が見えなくなつちや大變だ」

「だから見えてるから、好いぢやないか。余計な事を云はずに歩行いて居れば自然と山の上へ出るさ」

細長い男は返事もせず、帽子を脱いで、胸のあたりを煽いで居る。日頃からなる廂に遮ぎられて、菜の花を染め出す春の強き日を受けぬ廣き額丈は目立つて蒼白い。

「おい、今から休息しちや大變だ、さあ早く行かう」相手は汗ばんだ額を、思ふ儘春風に曝して、粘り着いた黒髪の、逆に飛ばぬを恨む如くに、手巾を片手に握つて、額とも云はず、顔とも云はず、頸窩の盡くる

あたり迄、苦茶々に掻き廻した。促がされた事には
頓着する氣色もなく、

「君はあの山を頑固だと云つたね」と聞く。

「うむ、動かばこそと云つた様な按排ぢやないか。

かう云ふ風に。」と四角な肩をいとゞ四角にして、空
いた方の手に榮螺の親類をつくりながら、聊か我も動
かばこそその姿勢を見せる。

「動かばこそと云ふのは、動けるのに動かない時の
事を云ふのだらう」と細長い眼の角から斜めに相手を
見下した。

「さうさ、」

「あの山は動けるかい」

「アハ、又始まつた。君は余計な事を云ひに生れ
て來た男だ。さあ行くぜ」と太い櫻の洋杖を、ひゆう
と鳴らさぬ計りに、肩の上迄上げるや否や、歩行き出
した。瘠せた男も手巾を袂に収めて歩行き出す。

「今日は山端の平八茶屋で一日遊んだ方がよかつた。
今から登つたつて中途半端になる許りだ。元來頂上迄
何里あるのかい」

「頂上迄一里半だ」

「どこから」

「どこからか分るものか、高の知れた京都の山だ」

瘠せた男は何にも云はずににや／＼と笑つた。四角
な男は威勢よく喋舌り續ける。

「君の様に計畫ばかりして一向實行しない男と旅行
すると、どこもかしこも見損つて仕舞ふ。連こそいゝ
迷惑だ」

「君の様に無茶に飛び出されても相手は迷惑だ。第
一、人を連れ出して置きながら、何處から登つて、何
處を見て、何處へ下りるのか見當がつかんぢやない
か」

「なんの、是しきの事に計畫も何も入つたものか、高

「あの山ぢやないか」

「あの山でもいいゝが、あの山は高さ何千尺だか知つてゐるかい」

「知るものかね。そんな下らん事を。——君知つてゐるのか」

「僕も知らんがね」

「それ見るがいゝ」

「何もそんなに威張らなくてもいい。君だつて知らんのだから。山の高さは御互に知らんとしても、山上で何を見物して何時間かかる位は多少確めて來なくつちや、豫定通りに日程は進行するものぢやない」

「進行しなければ遣り直す^{だけ}丈だ。君の様に余計な事を考へてゐるうちには何遍でも遣り直しが出来るよ」と猶^{なほ}さつさと行く。瘠^はせた男は無言の儘あとに後^{おく}れて仕舞ふ。

春^{*}はものゝ句になり易き京の町を、七條^{*}から一條迄

横に貫^{つら}ぬいて、烟^ける柳の間から、温^{ぬく}き水打つ白き布を、高野川^{*たかのがは}の磧^{かはら}に數へ盡くして、長々と北にうねる路を、大方^{おほかた}は二里餘りも來たら、山は自^{おのづ}から左右に逼^{せま}つて、脚下に奔^{はし}る潺^{せん}湲^{くわん}の響も、折れる程に曲る程に、あるは、こなた、あるは、かなたと鳴る。山に入りて春は更^ふけたるを、山を極^{きは}めたらば春はまだ残る雪に寒からうと、見上げる峯の裾を縫^ぬふて、暗き陰に走る一條^{ひとすぢ}の路に、爪^{*つま}上^{あが}りなる向ふから大原女^{*おほはらめ}が來る。牛が來る。京の春は牛の尿^{いばり}の盡きざる程に、長く且つ靜かである。「おゝい」と後^{おく}れた男は立ち留りながら、先^さきなる友を呼んだ。おゝいと云ふ聲が白く光る路を、春風に送られながら、のそり閑^{かん}と行き盡して、萱^{かやばか}許りなる突き當りの山に打突^{ぶつか}つた時、一丁先^さきに動いて居た四角な影ははたと留つた。瘠^はせた男は、長い手を肩より高く伸^のして、返れ々と二度程揺^ゆつて見せる。櫻の杖が暖かき日を受けて、又ぴかりと肩の先に光つたと思ふ間^{*}

もなく、彼は歸つて來た。

「何だい」

「何だいぢやない。此所から登るんだ」

「こんな所から登るのか。少し妙だぜ。こんな丸木まるぎ橋はしを渡るのは妙だぜ」

「君見た様に無暗に歩ある行あるいて居ると若狹わかさの國へ出て仕舞ふよ」

「若狹わかさへ出ても構はんが、一體君は地理を心得て居るのか」

「今大原女おほはらめに聽いて見た。此橋を渡つて、あの細い道みちを向へ一里上がると出るさうだ」

「出るとは何處へ出るのだい」

「叡山の上へさ」

「叡山の上の何處へ出るだらう」

「そりや知らない。登つて見なければ分らないさ」

「ハ、ハ、君の様な計畫好きでも其所迄は聞かなか

つたと見えるね。千慮の一失か。それぢや、仰せに従つて渡るとするかな。君愈いよく登りだぜ。どうだ、歩ある行あるけるか」

「歩ある行あるけないたつて、仕方がない」

「成程哲學者丈だけあらあ。それで、もう少し判然するいちにんまへと一人前だがな」

「何でも好いから、先へ行くが好い」

「あとから尾おいて來るかい」

「いゝから行くが好い」

「尾おいて來る氣なら行くさ」

溪川たにがはに危うく渡せる一本橋を前後して横切つた二人

の影は、草山の草繁き中を、辛からうじて一縷いちるの細き力に

頂もときへ抜ける小徑こみちのなかに隠れた。草は固より去年の

霜を持ち越した儘立枯の姿であるが、薄く溶けた雲を

透とほして眞上から射し込む日影に蒸し返されて、兩頬りやうけの

ほてる許ほかりに暖かい。

「おい、君、甲野さん」と振り返る。甲野さんは細い山道に適當した細い體軀を眞直に立てた儘、下を向いて

「うん」と答へた。

「そろ／＼降参しかけたな。弱い男だ。あの下を見給へ」と例の櫻の杖を左から右へかけて一振りに振り廻す。

振り廻した杖の先の盡くる、遙か向ふには、白銀の一筋に眼を射る高野川を閃めかして、左右は燃え崩るゝ迄に濃く咲いた菜の花をべつとりと擦り着けた背景には薄紫の遠山を縹緲のあなたに描き出してある。

「なる程好い景色だ」と甲野さんは例の長身を振ぢ向けて、際どく六十度の勾配に擦り落ちもせず立ち留つて居る。

「いつの間に、こんなに高く登つたんだらう。早いものだな」と宗近君が云ふ。宗近君は四角な男の名で

ある。

「知らぬ間に墮落したり、知らぬ間に悟つたりするのと同じ様なものだらう」

「晝が夜になつたり、春が夏になつたり、若いものが年寄りになつたり、するのと同じ事かな。それなら、おれも疾くに心得て居る」

「ハ、、、夫で君は幾歳だつたかな」

「おれの幾歳より、君は幾歳だ」

「僕は分かつてるさ」

「僕だつて分かつてるさ」

「ハ、、、矢つ張り隠す了見だと見える」

「隠すものか、ちやんと分つてるよ」

「だから、幾歳なんだよ」

「君から先へ云へ」と宗近君は中々動じない。

「僕は二十七さ」と甲野君は雑作もなく言つて退ける。

「さうか、それぢや、僕も二十八だ」

「大分年を取つたものだね」

「冗談を言ふな。たつた一つしか違はんぢやないか」

「だから御互にさ。御互に年を取つたと云ふんだ」

「うん御互にか、御互なら勘辨するが、おれ丈ぢや

……」

「聞き捨てにならんか。さう氣にする丈まだ若い所もある様だ」

「何だ坂の途中で人を馬鹿にするな」

「そら、坂の途中で邪魔になる。ちよつと退いて遣

れ」

百折れ千折れ、五間とは直に續かぬ坂道を、呑氣な

顔の女が、御免やすと下りて来る。身の丈に餘る粗朶

の大束を、縁り洩る濃き髪の上に壓へ付けて、手も懸

けずに戴きながら、宗近君の横を擦り抜ける。生ひ

茂る立ち枯れの萱をごそつかせた後ろ姿の眼につく

は、目暗縞の黒きが中を斜に抜けた赤襷である。一里

を隔てゝも、そこと指す指の先に、引つ着いて見える

程の藁葺は、この女の家でもあらう。天武天皇の落ち

玉へる昔の儘に、棚引く霞は長しへに八瀬の山里を封

じて長閑である。

「此邊の女はみんな奇麗だな。感心だ。何だか畫の

様だ」と宗近君が云ふ。

「あれが大原女なんだらう」

「なに八瀬女だ」

「八瀬女と云ふのは聞いた事がないぜ」

「なくつても八瀬の女に違ない。嘘だと思ふなら今

度逢つたら聞いて見様」

「誰も嘘だと云やしない。然しあんな女を總稱して

大原女と云ふんだらうぢやないか」

「屹度さうか、受合ふか」

「さうする方が詩的でいゝ。何となく雅でいゝ」

「ぢや當分雅號として用ゐてやるかな」

「雅號は好いよ。世の中には色々な雅號があるからな。立憲政體だの、萬有神教だの、忠、信、孝、悌、だのつて様々な奴があるから」

「なる程、蕎麥屋に藪が澤山出来て、牛肉屋がみんないろはになるのも其格だね」

「さうさ、御互に學士を名乗つてるのも同じ事だ」

「詰らない。そんな事に歸着するなら雅號は廢せばよかつた」

「是から君は外交官の雅號を取るんだらう」

「ハ、ハ、あの雅號は中々取れない。試験官に雅味のある奴が居ない所爲だな」

「もう何遍落第したかね。三遍か」

「馬鹿を申せ」

「ぢや二遍か」

「なんだ、ちゃんと知つてゐる癖に。憚りながら落第

は是でたつた一遍だ」

「一度受けて一遍なんだから、是からさき……」

「何遍やるか分らないとなると、おれも少々心細い。ハ、ハ、ハ。時に僕の雅號はそれでいいが、君は全體何をするんだい」

「僕か。僕は叡山へ登るのさ。——おい君、さう後足で石を轉がしてはいかん。後から尾いて行くものが劔呑だ。——あゝ随分草臥た。僕はこゝで休むよ」と甲野さんは、がさりと音を立て、枯薄の中へ仰向けに倒れた。

「おやもう落第か。口でこそ色々な雅號を唱へるが、山登りはから駄目だね」と宗近君は例の櫻の杖で、甲野さんの寐て居る頭の先をこつこつと敲く。敲く度に杖の先が薄を薙ぎ倒してがさ／＼音を立てる。

「さあ起きた。もう少しで頂上だ。どうせ休むなら及第してから、緩つくり休まう。さあ起きろ」

「うん」

「うんか、おや／＼」

「反吐^{へど}が出さうだ」

「反吐^{へど}を吐いて落第するの、おや／＼。ぢや仕方がない。おれも一と休息^{やすみ}仕らう」

甲野さんは黒い頭を、黄ばんだ草の間に押し込んで、帽子も傘^{かさ}も坂道に轉^かがした儘、仰^あ向けに空を眺めてゐる。蒼白^{そうはく}く面高^{おもだか}に削^けり成^なせる彼の顔と、無邊際^{むへんざい}に浮き出す薄き雲^{うすげん}の儼然^{げんぜん}と消えて入る大いなる天上界^{てんじやうかい}の間には、一塵の眼を遮^さぎるものもない。反吐^{へど}は地面の上へ吐くものである。大空に向ふ彼の眼中には、地を離れ、俗を離れ、古今の世を離れて萬里の天があるのみである。

宗近君は米澤^{よねざわ}絢^{はな}の羽織を脱いで、袖疊^{そでかさ}みにして一寸肩の上へ乗せたが、又思ひ返して、今度は胸の中から兩手をむづと出して、うんと云ふ間^まに諸肌^{もろはだ}を脱いだ。

下から袖無^{そでなし}が露^{あら}はれる。袖無^{そでなし}の裏から、もちや／＼した狐の皮が食^はみ出してゐる。是は支那へ行つた友人の贈り物として君が大事の袖無^{そでなし}である。千羊^{せんやう}の皮は一狐^{いつこ}の腋^{えき}にしかずと云つて、君はいつでも此袖無^{そでなし}を一着して居る。其癖裏に着けた狐の皮は斑^{まだら}にほうけて、無暗に脱落する所を以て見ると、何でも余程性^{たち}の悪い野良^{のり}狐^{ぎつね}に違^{ちが}ない。

「御山^{おやま}へ御登^{あが}りやすのどすか、案内しまほうか、ホ、妙^{めづ}な所に寐^めてゐやはる」と又目暗^{めくら}縞^{しま}が下りて来る。

「おい、甲野さん。妙^{めづ}な所に寐^めて居やはるとき。女に迄馬鹿にされるぜ。好い加減に起きてあるかうぢやないか」

「女は人を馬鹿にするもんだ」

と甲野さんは依然として天^{そら}を眺めて居る。

「さう泰然と尻^{しり}を据ゑちや困るな。まだ反吐^{へど}を吐きさうかい」

「動けば吐く」

「厄介だなあ」

「凡ての反吐は動くから吐くのだよ。俗界萬斛の反吐皆動の一字より来る」

「何だ本當に吐く積りぢやないのか。つまらない。

僕は又愈となつたら、君を擔いで麓迄下りなけりやならんかと思つて、内心少々辟易して居たんだ」

「余計な御世話だ。誰も頼みもしないのに」

「君は愛嬌のない男だね」

「君は愛嬌の定義を知つてゐるかい」

「何の蚊のと云つて、一分でも余計動かずに居様と云ふ算段だな。怪しからん男だ」

「愛嬌と云ふのはね、——自分より強いものを斃す

柔かい武器だよ」

「夫ぢや無愛想は自分より弱いものを、扱き使ふ銳利なる武器だらう」

「そんな論理があるものか。動かうとすればこそ愛嬌も必要になる。動けば反吐を吐くと知つた人間に愛嬌が入るものか」

「いやに詭辯を弄するね。そんなら僕は御先へ御免蒙るぜ。いゝか」

「勝手にするがいゝ」と甲野さんは矢つ張り空を眺めて居る。

宗近君は脱いだ兩袖をぐる／＼と腰へ巻き付けると共に、毛脛に纏はる縋縋の裾をぐいと端折つて、同じく白縮緬の周圍に疊み込む。最前袖疊にした羽織を櫻の杖の先へ引き懸けるが早い。「一劔天下を行く」と遠慮のない聲を出しながら、十歩に盡くる岨路を飄然として左へ折れたぎり見えなくなつた。

あとは靜である。靜かなる事定つて、靜かなるうちに、わが一脉の命を託すると知つた時、此大乾坤のいづくにか通ふ、わが血潮は、肅々と動くにも拘はらず、